

Future Beauty

MOT
MUSEUM CONTEMPORARY TOKYO
OF
ART
東京都現代美術館

プレスリリース
PRESS
RELEASE
2012.5

日本ファッションの未来性

Future Beauty:

30 Years of Japanese Fashion

2012.7.28 (sat) - 10.8 (mon, holiday)

20471120 (中川正博 + LICA)

アシードンクラウド (玉井健太郎)

アスキカタスキ (牧野勝弘)

荒川眞一郎

アンダーカバー (高橋盾)

アンリアレイジ (森永邦彦)

イッセイ・ミヤケ (滝沢直己)

エタブルオブメニーオーダーズ (新居幸治 + 新居洋子)

オー！ヤ？ (大矢寛朗)

オオタ (太田雅貴)

神田恵介

ケンゾー (高田賢三)

コム・デ・ギャルソン (川久保玲)

サカイ (阿部千登勢)

システレ (小島悠)

ズッカ (小野塚秋良)

ソマルタ (廣川玉枝)

タオ・コム・デ・ギャルソン (栗原たお)

立野浩二

舘鼻則孝

中章

ネ・ネット (高島一精)

ハトラ (長見佳祐)

ビューティ：ビースト (山下隆生)

ファイナル・ホーム (津村耕佑)

ポト (山本哲也)

堀内太郎

マトフ (堀畑裕之 + 関口真希子)

マメ (黒河内真衣子)

ミキオ・サカベ (坂部三樹郎 + シュエ・ジェンファン)

ミナ・ベルホネン (皆川明)

三宅一生

ミントデザインズ (勝井北斗 + 八木奈央)

森英恵

山本耀司

リトゥンアフターワーズ (山縣良和)

渡辺淳弥

www.mot-art-museum.jp

展覧会概要

日本ファッションが持つ創造性と、その力強いデザインに潜む文化的背景に焦点を当てた「Future Beauty: 30 Years of Japanese Fashion」展。2010年にバービカン・アート・ギャラリー（ロンドン）、2011年にハウス・デア・クンスト（ミュンヘン）で開催され、高い評価を得ました。新たな作品を加え、ヴァージョンアップした「Future Beauty 日本ファッションの未来性」展を2012年、東京で開催します。

20世紀後半、日本のファッションは、日本経済の成長と共に世界に羽ばたき、その独自性を開花させました。1970年代に高田賢三や三宅一生が欧米で活躍を始めます。彼らに導かれて、1981年、川久保玲や山本耀司がパリでデビュー。欧米の美意識から解放された日本デザイナーの作品は、〈前衛的〉と評され、その表現には賛否両論が飛び交いました。しかし、日本ファッションこそがやがて、ファッション界を牽引していくことになりました。

平面性、素材の重視、無彩色など、三宅、川久保、山本らの作品には、西洋的な美意識にとらわれない独自の表現と強度を持ったスタイルが備わっていました。彼らが西洋中心のだったファッション界に与えた影響の大きさは、彼らを尊敬するデザイナーが国籍問わず存在し、その〈前衛的〉だった表現がさまざまなレベルで一般化されているのをみれば明らかです。彼らの最も大きな功績は、アートからの視線を引き付けるなどファッションの可能性を大きく広げたこと、西洋の美意識の枠内に留まっていたファッションの創造性の扉を広く世界へと開いたことだといえるでしょう。

20世紀末以降、自由で創造性のあるスタイルを生み続け、着ることの新たな意味を提示する〈クールな場〉として、常に世界の視線を集め続ける日本。その後も現在まで、次世代の才気溢れるデザイナーたちが、独自の視点から服の新たな表現を追い求めています。

この度の東京都現代美術館での展示は、海外巡回の内容に加えて「日常にひそむ物語」というセクションを新たに設け、今後の方向性を示唆する若手のファッションデザイナーの作品も併せて紹介します。

80年代の「脱構築と革新」から、90年代の“生きるコンセプトを「Attitude（態度）」として見せる世代の表現”を経て、2000年代の食べる、眠る、友人とおしゃべりをするといった“日々の行為 = 「Behavior（ふるまい）」をもとにした「共感」世代のデザイン”。30年にわたるこれらの変遷を通覧することで、日本ファッションの未来性がみえてきます。

展示構成

I. 陰翳礼讃

20世紀後半、日本のファッションは、日本経済の成長と共に世界に羽ばたき、その独自性を開花させました。1970年代に高田賢三や三宅一生が欧米で活躍を始めます。それに導かれて、1981年、川久保玲や山本耀司がパリにデビュー。欧米の美意識から解き放たれた日本のデザイナーの作品は、〈前衛的〉と評され、その表現には賛否両論が飛び交いました。

この時の主調色・黒は、欧米ファッションに「黒の衝撃」を引き起こし、日本ファッションの代名詞ともなりました。

しかしそれは、多彩な色が溢れる当時のファッションに対するアンチテーゼ、意図的な提案でした。彼らの色彩はしばしば、谷崎潤一郎が『陰翳礼讃』で語る、あるいは墨絵にも似た黒の極めて豊かな諧調表現でした。19世紀以来男性服で一足早く黒が日常の色となった後、20世紀後期、黒は女性服にとっても時代の色となったのです。

II. 平面性

日本ファッションはしばしば、フォルムがない、と評されます。それは、日本人デザイナーが西洋的な衣服構成に捉われず、平面的な構成を自由に操ることができたからです。日本の着物に特徴的な平面的な構造は、世界各地に見られますが、これを知的な現代服に昇華させたのは、三宅一生の「プリーツ・プリーズ」でした。また、川久保玲の最新作にもこの特徴は明らかです。

平面的な構造の服は、オーバーサイズ、非定形、非対称でした。女性の身体を際立たせる西洋的な意味でのフォルムを持ちません。この、いわば身体を理性的に彫塑しない服は、身体に沿わない不合理な空間、〈間(ま)〉を生み、身体とは離れて自由なフォルムを生むことにもなりました。西洋的な秩序ある構造性の欠如の中に、逆説的に構造を打ち立てる。換言すれば脱構築的な行為は、ファッションを服飾造型の新たな次元へと導いたのです。

III. 伝統と革新

素材に対する日本人デザイナーの鋭い感性は、当初から西洋に高く評価されるものでした。三宅、川久保、山本らは当初から既成の素材に依存せず、テキスタイル・デザイナーとの協働により素材を開発しながら、独自性のある服を作ってきました。その姿勢は、より若い世代の渡辺淳弥、マトフらにも明確に見られます。

こうした姿勢とそれを具現化する日本の繊維産業の関係は、世界でも他に例を見ません。伝統的な着物文化が育んだ高度な染織技術、素材に対するこだわりは、第二次大戦後に発達した化学繊維産業の時代となっても受け継がれました。日本人デザイナーは天然繊維と化学繊維を等価の材料として扱い、そこに、これも日本が先導する先端テクノロジーによる多様な加工技術を加えて、新しい表情や質感、さらには新しい機能性をも生み出しています。日本ファッションは、デザイナーの創造力と日本の伝統が交差した地点で生み出されます。

IV. 日常にひそむ物語

現在の私たちは、世界各国のコレクションをインターネットで発表と同時に見ることができます。また、ファスト・ファッションの普及によって、低価格で見栄えのよい服を簡単に手に入れます。モノや情報が瞬時に容易に「消費」される流れの中、服の背後にある物語を感じさせようとするデザイナーが多く現れています。サブカルチャーからの引用、生産プロセスへのこだわり、あるいは服にストーリーを織り込むなど、その手段はさまざまです。

彼らに特徴的なのは、そうしたコンセプトを「Attitude(態度)」として一方的に表明するのではなく、着る人の日常的な「Behavior(ふるまい)」の中で作り手の考えに気付き、共感してもらう服を作り出そうとしていることです。着る人が、社会が、服と対話しながら、作り手から託された物語の続きを紡いでいくことができる。根源的な服との関係が、新たに始まるようとしています。

本展の見どころ

1) 初めての本格的な日本ファッション展

三宅一生、川久保玲、山本耀司ら世界に誇る日本ファッションの巨匠たちと、日本ファッションのDNAを継承する若手の作品が一堂に会する国内初の大規模展覧会。世界が日本ファッションに目を向けるきっかけを作った20世紀後期から、まさに現在まで、約35組の多彩なデザイナーたちの、厳選された作品約100点によって、日本ファッションを文字通り総括し、その未来を探ります。

2) Future Beautyとは？

1980年代、日本ファッションは、黒いぼろ、と言われて世界に熱い議論を呼び起こしました。しかしそれは、欧米の既成概念に揺さぶりをかける21世紀のファッションの方向を示唆する衣服革命、いわば「Future Beauty」と呼ぶべき美意識だった、のです。世界的に高い評価を得る京都服飾文化研究財団（KCI）のコレクションを中心に、伝説的な1980年代の川久保玲、山本耀司の作品、「ソマルタ」のレディ・ガガ着用モデル、「ミナ・ペルホネン」のグラフィカルなテキスタイルなどを展示。さらにコレクション・ショーの映像、デザイナーのドキュメンタリー、プリント・マテリアルなどの資料を加え、「Future Beauty 日本ファッションの未来性」を多角的な視点から解き明かします。

3) 若手の新作をフィーチャー

ブランド設立10年未満の若手デザイナーの作品をフィーチャーします。作品展示に加え、デザイナーとのトーク・ショーを通して、未来の日本ファッションを担う彼らが今、混沌とした時代をどのように見つめ、何を語ろうとしているのか、その真髄に迫ります。

4) ロンドンでセンセーションを呼んだ「Future Beauty」展

2010年、本展はロンドンのバービカン・アート・ギャラリーで開催、その後ミュンヘンに巡回。「すべての人々に必見の展覧会」と多くのメディアに取り上げられました。展示デザインは、世界から熱いまなざしを向けられている新進気鋭の建築家、藤本壮介。彼が初めて展示デザインを手がけました。また、本展は、2013年シアトル・アート・ミュージアムに巡回予定です。

展示デザイン：

藤本壮介（建築家）

1971年、北海道生まれ。東京大学工学部建築学科卒業。藤本壮介建築設計事務所主宰。現在、慶応義塾大学・東京理科大学非常勤講師。代表作に情緒障害児短期治療施設バウムハウス（2006年）、武蔵野美術大学図書館（2010年）。2011年、台湾タワー・コンペに優勝。主著に『原初的な未来の建築』（INAX出版）、『建築が生まれるとき』（王国社）他。

藤本壮介氏 ステートメント

ロンドン、ミュンヘンに引き続き、「Future Beauty」東京展の会場構成を担当することとなり、とても光栄であり、わくわくしています。僕自身、本展に関わるなかで、この30年余りの日本ファッションのすばらしい成果に深い感銘と刺激を受け取りました。今回の東京展では、これまで以上にバージョンアップする予定です。会場構成においては、各デザイナーの作品をしっかりと鑑賞できるようにするのはもちろんのこと、服、ファッション、見ること、着ること、日常、非日常といった、鑑賞者と作品との関係をさまざまな形で問いかける場となることをイメージしています。ご期待ください。

京都服飾文化研究財団とは

京都服飾文化研究財団（KCI）は1978年の設立以来、現在の私たちの衣服の源泉である西欧の服飾、服飾に関する文献や資料を体系的に収集・保存し、研究・公開しています。

現在、17世紀から現在までの服飾資料1万2千点他を所蔵。その中にはコム・デ・ギャルソンからの寄贈品1千セットを筆頭に、イッセイ・ミヤケ、ヨウジ・ヤマモト、さらにはシャネルやルイ・ヴィトン他からの寄贈品も含まれます。メトロポリタン美術館などの美術館からたびたび出展要請を受けるコレクションは、世界的に高く評価され、『ファッション 京都服飾文化研究財団コレクション 18世紀から現代まで』（タッシェン 2002年）は40万部に達しました。

KCIの総合的なファッション展は、タイムリーに服飾の多面的な相貌を展望します。これまでに実現した「モードのジャポニスム」「身体の夢」「COLORS ファッションと色彩」「ラグジュアリー：ファッションの欲望」など、東京都現代美術館をはじめとする他館と共催した大規模な企画展は、新しいファッション展への流れをリードしています。

展覧会情報

- 展覧会名： Future Beauty 日本ファッションの未来性
- 会場： 東京都現代美術館 企画展示室3階
〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1
- 会期： 2012年7月28日（土）～ 10月8日（月・祝）
- 休館日： 月曜日（ただし9/17、10/1、8は開館、9/18（火）は休館）
- 開館時間： 10：00～18：00（入場は17：30まで）
- 観覧料： 一般1,000円（800円） 大学生・65歳以上800円（640円）
中高生500円（400円） 小学生以下無料
- ※（ ）内は20名様以上の団体料金
※本展チケットで「MOTコレクション」もご覧いただけます。
- 同時開催：
「館長 庵野秀明 特撮博物館 ミニチュアで見ると昭和平成の技」 7/10（火）～ 10/8（月・祝）
「MOTコレクション」 5/19（土）～ 10月8日（月・祝）
「ブルームバーグ・パヴィリオン・プロジェクト」～ 10月上旬
- 主催： 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館、
公益財団法人京都服飾文化研究財団、
日本経済新聞社
- 特別協賛： メルセデス・ベンツ日本株式会社
- 協賛： 株式会社資生堂
- 助成： 公益財団法人朝日新聞文化財団、公益財団法人野村財団
- 特別協力： 株式会社ワコール
- 協力： NECディスプレイソリューションズ株式会社、吉忠マネキン株式会社
- 後援： 経済産業省、東京ファッションデザイナー協議会、
一般社団法人日本アパレル・ファッション産業協会、日本百貨店協会、
一般社団法人日本ファッション・ウィーク推進機構、
一般社団法人日本ファッション・エディターズ・クラブ、
一般財団法人日本ファッション教育振興協会、一般財団法人日本ファッション協会、
一般財団法人ファッション産業人材育成機構、一般社団法人日本ボディファッション協会
- 企画： 京都服飾文化研究財団 チーフ・キュレーター 深井晃子
東京都現代美術館
- 展示デザイン： 藤本壮介（藤本壮介建築設計事務所）
- 展示内容： 衣装 - 約100点（おもな所蔵先・公益財団法人京都服飾文化研究財団 他）
（予定） 映像 - 出展作品のファッション・ショー
- 三宅一生、川久保玲、山本耀司のドキュメンタリー
（バービカン・アート・ギャラリー編集 2010年）
- 「都市とモードのビデオノート」（ヴィム・ヴェンダース監督 1989年）他
プリント・マテリアル -DM、招待状、パンフレット等
- 展覧会： 2012年7月下旬発売予定 価格未定 平凡社刊 約250頁（予定）
カタログ 『Future Beauty 日本ファッションの未来性（仮）』
（『Future Beauty: 30 Years of Japanese Fashion』日本語版）
- 関連企画： 日本ファッションの過去から現在を語る関連企画としてトーク・イベント等を実施します。詳細は東京都現代美術館HPにてお知らせします。

広報用画像

本展覧会広報用素材として下記画像8点をご用意しております。ご希望の方はお手数ですが別紙にてお申込みください。



① 川久保玲 (コム・デ・ギャルソン)
1983年秋冬
京都服飾文化研究財団所蔵、
株式会社コム デ ギャルソン寄贈、
林雅之撮影



② 山本耀司 1983年春夏
京都服飾文化研究財団所蔵、
小山壽美代氏寄贈、広川泰士撮影



③ ミントデザインズ 2012年
「アーカイブドレス」
© mintdesigns



④ ミナ ペルホネン 2005年 「forest parade」
© minä perhonen



⑤ 津村耕佑 「ファイナル・ホーム」 2012年



⑥ サカイ/阿部千登勢
2012年春夏 ©sacai



⑦ ハトラ 2011年秋冬
photographer: Maki Taguchi,
stylist: Sota Yamaguchi,
model: Shohei Yamashita



⑧ ミキオサカベ/坂部三樹郎、
シュエ・ジェンファン 2011年秋冬
©株式会社ミキオサカベ

東京都現代美術館 事業推進課企画係 広報班宛

FAX. 03-5245-1141

本展覧会広報用素材として、作品画像8点をご用意しております。

ご希望の際は下記申込用紙に必要事項をご記入の上、ファックス又はEメールにてお申込みください。

なお、写真の使用に際し、以下の点をご注意ください。

① キャプションは、作家名、作品名、制作年、撮影者等を必ず表記ください。

② 作品のトリミング、文字載せはお控えください。

本展記事を紹介頂く場合には、恐れ入りますが情報確認の為に校正、掲載誌（紙）、DVD、CD等をお送りください。

また読者様・視聴者様へのプレゼント用招待券もご手配可能ですので、ご希望の場合はお申し付けください。

媒体名： 『 』

○印をおつけください

種 別： TV ラジオ 新聞 雑誌 フリーペーパー
ネット媒体 携帯媒体 その他

発売・放送予定日：

御社名：

ご担当者名：

Eメールアドレス：

@

(〒 -)

ご住所：

お電話番号：

FAX：

図版番号： ご希望の図版番号に ✓ をおつけください。

- ① 川久保玲（コム・デ・ギャルソン） 1983年秋冬
- ② 山本耀司 1983年春夏
- ③ ミントデザインズ 2012年 「アーカイブスドレス」 ©mintdesigns
- ④ ミナ ペルホネン 2005年 「forest parade」 ©minä perhonen
- ⑤ 津村耕佑 「ファイナル・ホーム」 2012年
- ⑥ サカイ／阿部千登勢 2012年春夏 ©sacai
- ⑦ ハトラ 2011年秋冬 photographer: Maki Taguchi, stylist: Sota Yamaguchi,
model: Shohei Yamashita
- ⑧ ミキオサカベ／坂部三樹郎、シュエ・ジェンファン 2011年秋冬 ©株式会社ミキオサカベ

読者様プレゼント用招待券をご希望の場合は✓をおつけください。 10名様 / 20名様

広報お問い合わせ先： 東京都現代美術館 事業推進課企画係 広報班

野口 r-noguchi@mot-art.jp / 伊藤 s-ito@mot-art.jp

東京都江東区三好4-1-1 TEL.03-5245-1134（直通）/ FAX.03-5245-1141